矢澤洋爾の Photo Essay

13：有限の人生

生垣として植えられたツツジが美しい花をつけている。赤やピンクと色とりどりの中、純白の花に昨夜の雨が露として残って朝の光に輝いている様は心洗われる思いがする。

玄関の軒先にはツバメが去年と同じ巣に戻って来てツガイで休んでいる。その下の鉢植えのスミレの黄色と紫の花がまぶしい。

庭では去年の秋に蒔いたサヤエンドウに赤紫の花が咲き、今朝はその実を摘み取り茹でて食べた。芝生にハナミズキの白い花びらが形を崩さずに散って、その横でみかんの花が白く小さなつぼみをつけている。

世があげて初夏の再来を喜んでいるようだ。

今年は帰省の途中日本三大桜の一つ、岐阜県本巣市の根尾谷淡墨桜を見る機会を得た。満開時は白く、散る間際には淡い墨色になるといわれるその桜の、満開を過ぎあと数日で散ろうかと言う時期にちょうど名古屋周辺を通りかかったのは幸運であった。こんなことは残りの人生でおそらく二度とないだろうと思われた。

最近なぜか「残りの人生で何回か」という事が気になってしようがない。純白のツツジに心躍らせるのも、満開の桜を愛でるのも、おそらくもう二、三十回程度だろう。海水浴を楽しむのはもっと少ないに違いない。

いつ頃からか両親の享年の平均を一つの限界と考えるようになってきた。そうすると今まで何気なく見てきた花たちがいっそう輝いて見える。晴れた日にはベランダに布団を干せるのが嬉しい。家族で夕食の卓を囲み談笑する団欒も残念だが無限にあるわけではない。おそらく人生は有限だからこそ美しい。分母は小さければ小さいほど価値が高くなり、感謝の気持ちも強くなる。

連休明けにはもう一度満開の藤の花を見に行こうとおもっている。

（2008.5.8）